

東海の古代

第294号 2025年2月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

『隋書』の倭国は熊本

名古屋市 田沢 正晴

1. 『隋書』倭^{たいこく}国伝の謎

『隋書』倭国伝には実に謎が多い。冒頭「倭国在」から書き始められていて、他の史書が倭国としている中であって、『隋書』だけは倭国としていることが最初の謎である。定説では倭国は倭国の誤記、あるいは倭は倭の別字であるとするが、簡単に誤記、別字と決めつけるのは良くないだろう。

この「倭」は数行後に「漢光武時遣使入朝自稱大夫 安帝時又遣使朝貢謂之倭奴国」とあって、再度登場する。この一文は『後漢書』からの引用であるが、その『後漢書』には、光武帝建武中元二年（57年）の朝賀は「倭奴国」、安帝永初元年（107年）では「倭国」とある。それを『隋書』では「安帝時倭奴国」としているので、国名と年次に不一致がある。

いや、恣意的な書き分けかも知れない。『隋書』の撰者魏徵は『後漢書』の倭奴国が九州内の小国に過ぎないことを新たに知った時点で、倭奴国と倭国を共に「倭奴国」と書き改めるべきだと確信したのだろう。魏徵は九州以外に倭国が存在していたことも承知しており、その倭国は、倭国よりも広範囲の国であるとの認識だ。

中国の史書では新しい知見を得た段階で、それ以前の史書を書き換えることはよくある。この新しい知見とは、隋の遣使、裴世清が倭国から得た情報に他ならない。

何れにしても、倭国伝には「倭」が用いられ、『隋書』本紀には「倭」が使われているのは、魏徵が「弱々しい」の意味を持つ「倭」の字を、倭国（西日本一帯か）よりも小国である九州の一国に当てたためと思料する。結論として、私は倭国と倭国は異なる国であると確信する。倭国が倭国の一部であることは、石田泉城氏が『「倭」は「倭」の“One of them”』とご自身のブログ(2023/4/8・2022/5/29)で述べておられ、極めて分かりやすい。

二つ目の謎は、「其國境東西五月行南北三月行各至於海」（その国境は東西五月行、南北三月行で、それぞれ海に至る。）である。この方位と距離の謎が解ければ、倭国（倭国）の領域がわかるので、難解ではあるが大変重要である。詳細は後述する。

さて、三つ目の謎が、本稿の最大のテーマである「倭国」の比定地である。倭国伝の後段に次の記述がある。

「明年 上遣文林郎裴清使於倭国 度百濟行至竹島 南望聃羅國經都斯麻國迥在大海中 又東至一支國 又至竹斯國 又東至秦王國 其人同於華夏 以為夷洲疑不能明也 又經十餘國達

於海岸 自竹斯國以東皆附庸於倭」

(明くる年(608年)、お上(煬帝)は文林郎の裴世清を使者として倭国へ派遣した。百済へ渡り、竹島(朝鮮半島南西部の珍島)に至る。南に耽羅国(済州島)を望み、はるかな大海の中にある対馬国を経て、また東の壱岐国へ至り、また筑紫国へ至る。また東の秦王国に至る。その人は中国人と同じで、夷洲と思われるが、明らかでない。また十余国を経て海岸に到達する。筑紫国以東はみな倭に付属している。)

それでは早速、この数行の行程記事から、倭国の所在地を読み解いて行こう。

2. 倭国はどこか

607年に倭王多利思北孤は隋に朝貢している。その時の国書が有名な「**日出ずる所の天子、書を日没する所の天子に致す。恙なきや、云々。**」である。隋の2代目皇帝煬帝はその国書を見て喜ばなかったが、なぜか翌年の608年、裴世清を倭国に派遣している。その行程は、百済から朝鮮半島南西端の珍島経由、対馬に向かい、「東」の壱岐、筑紫に至る。そこから「東」の秦王国、十余国を経て海岸に到着する。

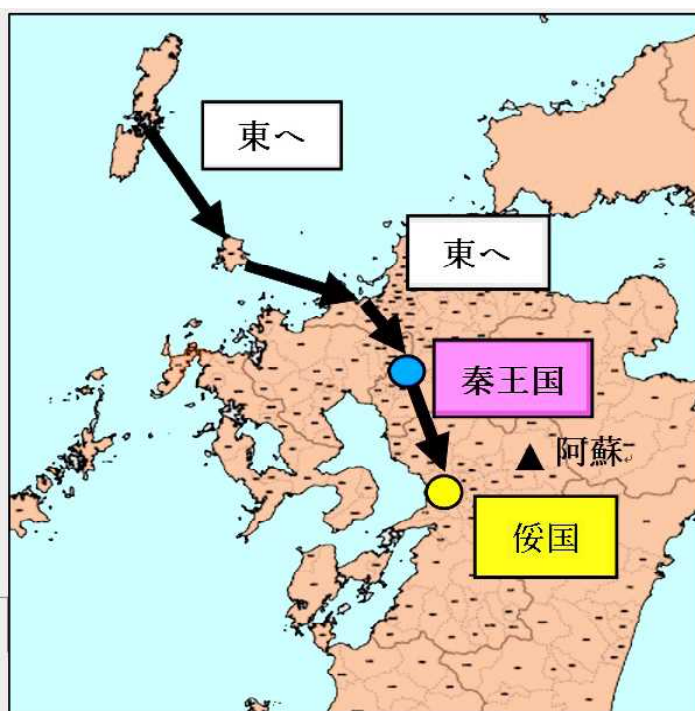
この行程を見てほとんどの人は、筑紫から東へ向かうので、瀬戸内海を通過して大阪湾で上陸したと考えるだろう。定説もそうである。果たしてこれは本当なのだろうか。

私が最初に疑問に思うのは、阿蘇山の記述である。「**有阿蘇山其石無故火起接天者 俗以為異因行禱祭**」(阿蘇山がある。その石は理由もなく火がおこり天にとどく。人々は不思議なことだとして、祈って祭を行う。)

この一節には阿蘇山を実際に見たからこそ書けるリアルさがある。倭人からの伝聞だけではおそらく書き残さなかつただろう。だから、阿蘇山が全く見えない山口県を秦王国に比定することはできない。大分県(豊国)とする説もあるが、日田、由布院から別府に至る国道210号線からは阿蘇は見えない。ルートから離れて山に登るとか、たまたま大きい噴火が起きれば印象に残るかも知れないが、そうでなければ、『隋書』にある最終地点の海岸は、周防灘や伊予灘ではないと考えざるを得ない。

では、倭国はどこだろう。それは阿蘇の見える熊本である。

こう言えば大部分の方は「熊本は筑紫の東でなく南だろう」と即座に反論されるに違いない。しかし、この地図をよく見て欲しい。『隋書』には対馬から壱岐へは「東」、筑紫から秦王国へも「東」と書いてある。このラインをそのまま延長すれば、熊本に達することは何ら不思議でない。秦王国の比定地についても諸説あるが、仮に大宰府とすればこの矢印にも合致し、経路上に乗る。また、到達地点については「海岸」と明記されており、熊本は確かに有明海に面している。このようにして、『隋書』に示された行程を辿れば、熊本に着くことをご理解頂けると思う。



ちなみに、倭国の海岸を熊本周辺に比定する先行研究には、主に次の著述がある。

- ・古賀達也氏：「肥後の翁と多利思北孤」（2016年10月11日古田史学会報136号）において、「菊池川下流か熊本市付近の海岸」に達したとの説を述べておられる。
なお、古賀氏はご自身のブログ「洛中洛外日記」（2023/7/13）で、当初の有明海を「もっと南の不知火海方面かも知れない」とされた。
- ・谷本 茂氏：2020年6月10日古田史学会報158号において、『文政年間 国郡全図』の幹線道路図を用いて、倭王の都は、飽田郡の（有明海）海岸部あるいはそれに隣接する玉名郡の海岸部の周辺に存在したと結論づけておられる。
- ・矢治一俊氏：『隋書倭国伝の証明』（近代文芸社、1998年発刊）で倭国の都邪麻堆は有明海北東部沿にあったとされる。

また、東海古代研究会に最近入会された堀口啓一氏は、2015/9/22のブログで有明海の可能性を示唆されている。

これらの論考は、何れも有明海沿岸を想定されていても、本稿で示した熊本には特定していない。私は、到達地点は熊本市、しかもピンポイントで「熊本城付近」と考えている。

3. 秦王国は鞠智城^{きくちじょう}

ここからは、「倭国熊本説」をさらに補強するために、「秦王国鞠智城説」について述べる。鞠智城は、熊本県の山鹿市と菊池市にまたがる丘陵に築かれた古代山城である。『続日本紀』天武天皇二年(698年)条に、「大宰府をして大野、基肆、鞠智の三城を繕治せしむ」とあるので、定説ではヤマト王権が白村江の戦いの後に唐・新羅からの防衛のために築いたとされる。

しかし、鞠智城は大宰府の南62kmに位置しており、大宰府の防衛拠点とは到底考えられない。唐・新羅の軍勢が博多湾から大宰府方面へ攻め込んできたなら、鞠智城のこの位置で大宰府を守れるはずがないのである。従って、鞠智城の南25kmの倭国の都、熊本を守るために築いたと考える方が、余程辻褄が合う。

続いて築城時期について検討する。鞠智城跡からは、八角形建物跡や百済系の銅造菩薩立像が出土している。このことから、

562年に加耶諸国（任那）が新羅に滅ぼされた頃、多くの人が移民となって百済、加耶の文化を倭に持ち込んだことが推察される。定説では鞠智城は663年の白村江の戦い以降の築城とされているが、ここまでの考察で608年の裴世清来訪以前に築城されたと考えて差し支えないだろう。

なお、秦王国を渡来系氏族の秦氏と関連付けて、秦氏が居住していたとされる周防や豊に比定する論考をよく見かける。しかし、阿蘇山の記述を重く見ればこれらは排除すべきであろう。つまり、秦王国は秦氏の王国ではなく、秦王の国とするのが正しい。このことは石田泉城氏が「隋、唐などでは皇帝の次男、三男などが皇帝を支える役割を担って秦王に封じられるので、倭国の秦王国は秦王の国である」との説を「倭国伝の秦王国について」（2015年12月「東海の古代」182号）で詳細に述べておられる。また、古田武彦氏は『古



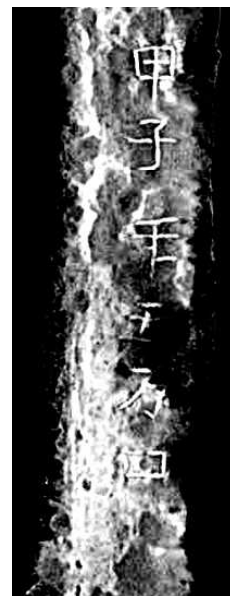
代は輝いていたⅢ』(1985年)で「隋の文帝(楊堅)の三男煬俊が秦王に任ぜられ、煬俊の子楊浩も秦王に立てられた」として秦王に言及している。

秦王が倭国王を補佐する立場であるとするれば、倭国の都から北25kmの鞠智城(秦王国)にいて、倭国を守備するというのは理に適っている。

『隋書』が書かれた当時の中国の知識人は「秦王」の文字を見た瞬間に、それが皇帝を補佐する人を意味することだと思い当たるはずである。逆に、「秦王国」を見て秦氏を思い浮かべることはまずあり得ない。中国人にとって秦王は常識で、秦氏は常識ではない。多くの日本の学者、研究者はこのことに、何故気付かないのだろうか。

4. 倭国を熊本城跡に比定する理由

さて、遅ればせながら倭国を熊本城跡に比定する根拠について説明する。2022年4月に熊本城跡の敷地から出土した鉄刀を、熊本大学などがX線解析によって分析した結果、「甲子年」を含む6文字の象嵌銘文が見つかった。6文字は「甲子年五□□」で、最後の2文字は「月中」とされ、「五月中」は縁起の良い吉祥句であると考えられる。古墳時代の横穴群付近で発見されたことや装飾付大刀の形状から、甲子年は西暦604年に製作したことを示す可能性が高いとされる。銘文が入った古墳時代の鉄の刀剣出土は全国的にも珍しい。これまでに7県で7例が確認されているだけで、熊本県内では江田船山古墳出土の国宝鉄刀に次いで2例目である。この「甲子年」鉄刀の意義について重要なポイントが二つある。



(1) 金銀の象嵌が施されていないこと

604年は隋の2代目皇帝煬帝の即位年である。即位の慶賀のために倭国が製作したと考えるのが一番自然だろう。また、604年の甲子年に製作されたということは、600年の「阿每多利思北孤」で有名な第1回遣隋使と、607年の「日出處天子致書日没處天子」の第2回の間の年に当たり、607年の隋への遣使に製作したとも思われる。

何れの場合でも、この鉄刀が隋に贈られず倭国に残っているのは、試作品もしくは予備だったからではないか。金銀の象嵌が施されていない理由については、贈答日程が確定した後に、金または銀で象嵌する予定だったと考えれば納得できる。

(2) 冊封との関係

この鉄刀に「甲子年」と干支が象嵌されていることから、隋による倭国への冊封はなかったことが分かる。中国の冊封国は必然的に中国の元号を用いることを強制されるからである。『隋書』からは倭王が隋帝から王などの官職を与えられたとの記載はないので、冊封はなかったことは明白ではあるが、見方を変えれば「甲子年」という干支を示すことで、冊封関係にないことをアピールしたかったのかも知れない。

この鉄刀以外にも、熊本城付近が倭国の重要拠点であったことを考古史料で示しておく。熊本市内には古墳時代の古墳・遺跡が次のとおり何ヵ所か存在する。

渡鹿(とろく)遺跡群	古墳時代後半(6世紀末～7世紀前半)の竪穴住居集落。
上代町遺跡群	赤漆塗木製剣柄、馬の埋葬土坑。権力者の存在が想定。
上ノ郷遺跡	大型の掘立柱建物や硯などが出土。官的な施設か。
千金甲(せごんこう)古墳	赤・青・黄の顔料を用いた石障内壁を持つ。
つつじヶ丘横穴群	6世紀後半～7世紀前半の造営。18群48基が確認。

住居集落や官的な施設は確認できるが、この時代の大規模な古墳が近くには見当たらない。従って、熊本は倭国の都ではあっても、行^{あんぐう・かりみや}宮だったとも考えられる。

5. 天を以って兄と為し、日を以って弟と為す

本稿のテーマである、倭国の位置についてはここまでの考察で一応の結論が得られた。そこで、以前から何かと気になっていた『隋書』倭国伝の中の「倭王以天為兄以日為弟」（倭王は天を兄とし、日を弟とする）について、ここで検討してみたい。これは有名な「開皇二十年 倭王姓阿每字多利思北孤」のすぐ後に現れる。

この一文を「兄は天であり弟は日である」との解釈することには誰も異を挟まないだろう。一般的には、兄は「天」なので天空全体を表し、弟は「日」なので太陽をイメージしているとされる。しかし、兄の「天」の支配地域を天孫降臨の地である筑紫とし、対する弟の「日」は音韻から肥に結びつくので、その領域を肥国と考えてみてはどうだろう。兄の多利思北孤は筑紫なので大宰府か八女のあたりを都とし、弟の「日」は肥国の鞠智城で兄を補佐していたとすると、前項までの行程経路との整合性が取れる。

さらに、この兄弟関係から倭国は筑紫国と肥国の連合国家であることが分かる。また、倭国伝には「自竹斯國以東皆附庸於倭」（筑紫国以東はみな倭に付属している。）と記されているので、倭国には対馬や壱岐が含まれず、筑紫国と肥国の二国に限られることが裏付けられる。

話を少し戻して、多利思北孤の都について再び考えてみたいのだが、それを突き止めるために、まず6世紀の筑紫の状況を見ておこう。528年に磐井の乱が起きている。磐井は筑紫の君と称されるし、磐井の墓とされる岩戸山古墳の規模からみても、磐井が八女を基盤として筑紫を治めていたことは想像に難くない。磐井から70年後の多利思北孤の都も八女だった可能性は充分ある。

『隋書』倭国伝は「都於邪摩堆 則魏志所謂邪馬臺者也」（邪摩堆を都にする。すなわち、魏志の言うところの邪馬臺である。）とする。『隋書』の邪摩堆と『魏志』の邪馬臺は同じ場所だと言っているのである。仮に『隋書』の邪摩堆（邪馬臺）が上に述べたように八女であるならば、『魏志』倭人伝で邪馬臺（邪馬壹）だった場所が八女であることが、奇しくも証明されることになる。私は2023年12月「東海の古代」280号で、邪馬壹国を八女に比定しているので、八女に関する魏隋二つの拙論、すなわち「魏志の邪馬壹は八女、隋書の邪摩堆も八女」の二説が同時に強化されれば幸いである。

6. 其國境東西五月行南北三月行

本稿の冒頭で『隋書』倭国伝の謎として二つ目にあげたのが「東西五月行南北三月行」である。『隋書』にはこれに似た表現が何例かある。

列伝	国 勢 表 記	表記	実勢
① 倭国伝	其國 ^境 東西五月行 南北三月行 各至於海	横長	縦長
② 高麗伝	其國東西二千里 南北千餘里 都於平壤城	横長	横長
③ 百濟伝	其國東西四百五十里 南北九百餘里	縦長	縦長
④ 婆利伝	其國界東西四月行 南北四十五日行	横長	不明
⑤ 高昌伝	其 ^境 東西三百里 南北五百里 四面多大山	縦長	横長

表記と実勢が一致するのが、②高麗伝、③百濟伝、一致しないのが⑤高昌伝である。④の婆利伝はジャワ島とされるが、ジャワ島の全体なのか一部なのか不明なので、検討からは除外する。⑤の高昌は現在の新疆ウイグル自治区トルファン市である。トルファン市（トルファン盆地）は東西に長いので、高昌伝の「其境東西三百里 南北五百里」の表記（縦長）と、実際の地形（横長）が異なる。この理由を考えると「其境」の文字の存在に気付く。

②③は「境」がないので表記と実勢が一致する。「境」のある⑤は表記と逆にすれば良いのである。それが意味するところは「其の境である東辺と西辺の長さは三百里、南辺と北辺の長さは五百里」と読めば縦長ではなく横長が正しいことが理解できる。

この論理を用いれば、①の倭国伝も一見した表記は横長であるが、「境」があるので縦長と考えるのが正しいということは、誰もが容易に理解できるだろう。倭国は縦長であり、九州の地勢に一致する。なお、石田泉城氏も縦長説であるが、「境」について言及されていない点が本稿と異なる。

7. まとめ

実に謎の多い『隋書』倭国伝ではあるが、一つひとつ論理立てて読み解くことで、定説を超えた結論に到達できたと思う。要点を以下の4点に集約し、本稿のまとめとする。

① 倭国は倭国よりも狭い範囲であり、九州内の筑紫国と肥国の連合国家である。

倭国は、兄の多利思北孤が筑紫国を治め、弟の「日」が肥国を治める。

② 倭国までの行程の終着点は有明海沿岸の熊本市である。

熊本市である根拠は、熊本城跡から発見された「甲子年」銘文の鉄刀である。

③ 秦王国は秦氏の王国ではなく、「秦王」の国であって、鞠智城きくちと思われる。

④ 『隋書』『魏志』それぞれの邪馬臺（邪摩堆・邪馬壹）はどちらも八女市に所在し、そこが筑紫国の都である。また、肥国の都は鞠智城（山鹿市と菊池市の境）である。

蛇足ではあるが、私は「東海の古代」279号(2023/11)・同280号(2023/12)において、『魏志』倭人伝の女王国「邪馬嘉国」を山鹿市に、同じく「邪馬壹国」を八女市に比定している。（女王国は遷都したため、二カ所あるとした）



獲加多支鹵はウェカタシロ(エカタシロ)と訓む (2)

吉川市 堀口 啓一

7 中古音で訓む

訓み方の最後の手段、それは漢語の中古音で訓むと言う手法である。中古音は当時の東アジア世界の標準語もしくは標準語に近い(標準語になりつつある)言語および発音であ

り、日本の歴史学者は何故この手法を採用しなかったのか、良く分からない。この手法がある事を本当に知らなかったのか、それとも何かしらの理由で故意に目を背けて来たのであろうか？

中古音で訓むと、表3^(*)のようになる。

表3 銘字の表音(万葉仮名と中古音を含む)

銘字	呉音	漢音	万葉仮名	中古音
獲	ワク	クワク(カク)	該当する表音無し	fuək(ウエク)
加	ケ	カ	カ	kā(カ)
多	タ	タ	タ	ta(タ)
支	シ	シ	キ甲類	tʃiě(シエ? チエ?)
鹵	ル	ロ	該当する表音無し	lo(ロ)

表音上の難点となっている獲字であるが、前半部分の fuə は、あるいは二重母音と呼ばれるものなのかも知れない。これはワ行音の四段目、ウェとなるのではないかと考えているが、歴史仮名遣いで書く所の片仮名エ(平仮名ゑ)に当たる。

fuəkの末尾のkであるが、後続する漢字によって発音したり発音しなかったり別の発音に変化したりと状況次第で発音が異なってくるのではないかとと思われる。となれば獲字の後に続く銘字も併せて考慮する必要があるが、[獲加多支鹵]の各字の発音を繋げると次のようになる。

・ fuək kā ta tʃiě lo

これを片仮名で表記すると、以下のいずれかかと思う(獲字の二重母音箇所の漢語の発音はウェであると見做している)。

- ・ ウェッカタチエロもしくはウェカタチエロ
- ・ ウェッカタシエロもしくはウェカタシエロ

tʃiě はシエなのかチエなのか迷うが、いずれの場合でも倭語ではシもしくはチに当てているのであろう。上記に対応する倭語を片仮名で表記すると次の通りかと思われる(二重母音箇所はウェ及びエと表記する)。

- ・ ウェッカタチロ(エッカタチロ)もしくはウェカタチロ(エカタチロ)
- ・ ウェッカタシロ(エッカタシロ)もしくはウェカタシロ(エカタシロ)

獲加は繋げて発音すると漢語としては少し特殊な発音となるのかも知れない。平坦にウェカとなるのかも知れないし、あるいは促音の小さなッ音を伴ってウェッカとなる事も考えられる。何分当時の漢語の発音は不分明な所もあるので、分からなくても致し方無い事ではある。なお、仮にウェッカと発音する場合のッ音は一字音よりも短い発音と見做し、半音位で収めても良いかも知れない。便宜上、今後はッ音を省いた表記とする。

fuəkの後続であるが、漢字の発音に忠実に従うのであればカタチロの方が正しいのかも知れない。しかし、カタチロと言う表音は日本語としてやや落ち着いた感がある。カタシロであれば、戸^{かたしろ}や形代^{かたしろ}と言う漢字を当てると語彙として非常に通意するものと思われるので、日本語として妥当であろう。これは何となれば、日本語として訓むのであればウェカタシロ(エカタシロ)と言う表音を採用したくなる。

*1 漢語の発音として片仮名表記を副えているが、これは私が想定する発音を基に記している。

さて、これまでに挙げた表音上の幾つもの難点が、中古音と言う手法を採用する事によって解消するものかどうかを確かめて行きたい。

まずは次の難点となるが、

難点④

呉音でワと言う表音を持つ漢字は幾つもあるので、敢えて獲字を用いるのは余りに不自然である

難点⑥

漢音でカやクと言う表音を持つ漢字は幾つもあるので、敢えて獲字を用いるのは余りに不自然である

獲字を中古音で訓むとなれば、こちらの難点は無関係と言う事になる。次は、

難点①

表音手法が統一されていないと言うのは著しく変である

銘字を全て中古音で訓むのであれば、この難点は解消される。次は、

難点②

一字で複数音を表すべき漢字の表音を恣意的に一部のみを切り取って訓むのは変である

獲字の中古音での発音を全て表音しているので、この難点も解消される。次は、

難点③

表音を一字ずつ分解して表記出来るのであれば一字毎に分解して表記すれば良く、一字で複数音を発すると言うのは変である

獲字の中古音は次の加字に影響を与えていて二字に分けられず、また母音は二音であるが二重母音と思われるので不可分なのである。次は、

難点⑤

画数が多く鉄剣の銘字には書き入れにくい獲字が用いられている以上、どうしても獲字で無ければならない理由があったものと思われる

ウェ(エ)-カと言う特殊な発音を表音する必要があったので、已む無く獲字と言う余り使用したくない漢字を使用するしか無かったと言う事であり、この難点も解消される。これで、獲字を中古音で訓む事により表音上の全ての難点が解消される事が分かる。何故中古音が使われたのかについては、後で述べる。

8 ウェ(エ)カタシロに当てる漢字

ここで、鉄剣の被葬者(あるいは銘字の象嵌者もしくは銘文の起草者)が何故ウェ(エ)と言う倭語表音に対して獲字を当てたのかを記しておく。起草者は倭語のウェ(エ)を表したかったのであろう。そのために相応しい漢字を探したのであろうが、随分と苦心したであろう様子が見て取れる。この後にエに相応する語彙およびその中古音を記しているが、ウェ(エ)に当たる漢字が中々見付からないのである。漢字候補の中では獲字が最もウェ(エ)に相応しいと思われるので、起草者はとても良い仕事をしたのであろう。私の目から見ても、ほぼ最上の選択であると思える。「グッジョブ!」「ベストチョイス!」と言った讃辞を贈りたい。

なお、ウェ(エ)と言う表記も冗長気味なので、便宜上、今後はエカタシロと表記する。それでは、エカタシロとは何であろうか?

もしかしたらエカタシロとは現代日本語では既に消失した語彙であるのかも知れない。

それでも敢えて関連がありそうな倭語は無いものかと調べて見ると、次のような語彙が思い浮かぶ。エは中古音での発音を添えておく。

- ・エ：恵(fuei:ウエイ) 慧(fuei:ウエイ) 衛(huei:ウエイ) 回(huei:ウエイ)
廻(huei:ウエイ) 畦(不明) 咲(sieu:シエウ)
- ・カ：鹿 処
- ・タ：田 誰
- ・シ：其
- ・ロ：ろ(東歌助詞)

『万葉集』の東歌に出て来る「ろ」には何の意味も無い事もある。その場合は**エカタシ**と言う王名であるとも考えられる。

倭語の一音毎に漢字を掲げたが、場合によっては複数音で意味を成す倭語を使用していた可能性もある。その場合を考慮すると、次のようになるであろうか。

- ・カタ：堅 形 潟 方 片
- ・シロ：代 城 白

これ等を組み合わせると、次のような倭語名となるであろうか。

- ・畦潟代
- ・恵潟代
- ・衛堅城
- ・恵形代
- ・恵方城

9 大野晋氏は曲学阿世の徒か

国語学者の大野晋氏は、随分と持って回った言い回しで「ワカタケルと読める」と主張している^{(*)1}。しかし、どのように訓むのか手法を明示しておらず、また発音記号類も示していないため、**読者は検証不能となっている**。時代に対応する発音の表が添えられており^{(*)2}、稲荷山剣銘と特筆されて呉音と書かれているが、それより前は上古音と書かれていて、それより後は中古音と書かれている。この図では何故か唐突に呉音が登場していて何とも理解に苦しむが、大野氏は上古音と呉音を交えて「ワカタケルと読める」と主張したい意図であると理解した。何故呉音を交えなければならないのかは表4を見れば判明する。

表4 銘字の表音(上古音を追記)

銘字	呉音	漢音	万葉仮名	中古音	上古音
獲	ワク	クワク(カク)	該当する表音無し	fuək(ウエク)	fuāk(ウァク)
加	ケ	カ	カ	kā(カ)	kār(カ)
多	タ	タ	タ	ta(タ)	tar(タ)
支	シ	シ	キ甲類	tʃiɛ(シエ? チエ?)	kieg(キエ)
鹵	ル	ロ	該当する表音無し	lo(ロ)	lag(ラ)

^{*1} 『日本語はいかにして成立したか』(大野晋、中央公論新社、2002年)。

^{*2} 前掲書P. 217。

上古音での発音を繋げると次のようになる。

・ **fuāk kār tar kieg lag**

これを片仮名で表記すると、以下のいずれかであろう。

・ ウアッカタキエラもしくはウアカタキエラ

これに相応する倭語は次の通りかと思われる。

・ ワカタキラもしくはワカタケラ

銘字の上古音はウア(ッ)カタキエラとなり、相応する倭語は**ワカタキラ**もしくは**ワカタケラ**である。非常に惜しいが上古音では“ワカタケル”とは訓めないのだ。そのために訓めない箇所の鹵字を呉音で訓んで強引に帳尻合わせを行っているのかも知れない。このような小細工を弄した動機は次の通りであろうか。

・ どうしても銘字を“ワカタケル”と訓みたい

・ しかし訓めない

・ ならば訓めるように手法を捻じ曲げてしまえば良い

国語学者は時に考古学の見解とは乖離する場合もあると思うが、考古学者が“ワカタケル”と訓んだ際に国語学者として疑義を呈すべきであった。少なくとも大野氏は上古音で“ワカタケル”とは訓めない事は**把握**していた筈である。何とも残念に思うが、定説に日和ってしまったのであろうか。

なお、本論攷は銘字を中古音で訓むと言う観点から書いているが、視点を変えて「**獲加多支鹵はワカタキラもしくはワカタケラと訓む**」と言った別論を起こす事も可能であろう。

10 動詞としての獲字

ここでは稲荷山鉄剣の銘字から少し離れて、獲字について触れておく。

『万葉集』・『古事記』・『日本書紀』は獲字を万葉仮名としては一切使っていないが、実は獲字自体は登場している。『日本書紀』での登場回数を数えた所、何と64箇所^(*)も使われていた。ここに一例を挙げておく。

廼以天之瓊瓊 玉也 此云努矛 指下而探之 是獲滄溟（『日本書紀』卷第一 神代上）

万葉仮名の章(6 万葉仮名で訓む)で述べているが、万葉仮名が使われている書物では獲字を表音文字(音仮名や字音仮名を指す)として利用していない。どうやら『日本書紀』と『古事記』の編者は獲字を「**獲**る」と言う動詞として使用している様に見受けられる。つまり、間接的にはあるが『日本書紀』と『古事記』の編者は獲字を**ワ**とは訓めないと証言している事になる。

ただし、稲荷山鉄剣は『日本書紀』編纂よりも時代が古いため、あるいはア行下二段活用動詞の「**獲**」の古形が遺存していたのかも知れない。当時の関東では「**獲**」の古い表音として「**獲**」(wu)が利用されていたとすれば、想定される活用形は次の表5の通りとなるであろう(無語幹動詞なので語幹箇所を(獲)と表記)。

表5 獲(wu)の想定活用形

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(獲)	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ

この活用形の連用形もしくは未然形がエとして使用されていたのかも知れない。

勿論、現代において一般的な日本語古語読解の枠組みを越えてしまっている史料である事は承知しているが、そもそも大昔の関東地方ではどのような言葉が使用されていたのかは判明していないのであるから、それを後代の古語の範疇^{とら}で捉え切れるかと言うと誰にも答えられないのでは無いか、とも思うのである。(続く)

*1 これは私が数えた数。

獲加多支鹵と夜摩苔

東海市 大島 秀雄

1 獲加多支鹵とは

稲荷山鉄剣銘の「獲加多支鹵」の読みについては、『日本語はいかにして成立したか』(大野晋、中公文庫、2002年)では、「**中国の三、四世紀ごろの東晋時代の南方の発音をあてはめると、ワカタケルとよむことができる。**」と書かれており、国語学者も歴史学者も見解は一致しているようです。

同じく鉄剣銘に出てくる「大王」の尊称は『日本書紀』の雄略紀にも使われており、この点でも獲加多支鹵を雄略天皇とするのは妥当です。

また、この鉄剣銘に記載の斯鬼宮は『記紀』の雄略天皇の長谷(泊瀬)朝倉宮とみられ、桜井市の脇本遺跡に比定されますし、明治30年時点の磯城郡内には朝倉村、初瀬村が存在することからも妥当ではないでしょうか。

2 夜摩苔とは

『日本書紀』景行天皇十七年条の歌に中の「夜摩苔」は、宇治谷孟氏らの現代語訳では「大和」に変換されていますし、神代上の天岩戸の段では天児屋命の親として興台産靈が登場し、「こごとむすひ」のルビが降られていますので、3世紀の倭人の用語として台は「と」と読まれていた可能性が考えられます。

また、『隋書』倭(倭)国伝によれば、「**都於邪摩堆、則魏志所謂邪馬臺者也、古伝、去楽浪郡境及带方郡竝一万二千里、在会稽之東、與儋耳相近**」と書かれ、7世紀の倭国の都は邪摩堆にあり、すなわち『魏志』のいう邪馬臺(台)となっています。

一方、『北史』によれば、『隋書』の「**邪摩堆**」は「**邪摩堆**」に変更されており、「**邪摩堆**」は誤写とされています。

つまり、邪摩堆は都があった場所なのでヤマトと読まれ、夜摩苔=邪馬台もヤマト(大和)と読むのが妥当であり、邪馬台をヤマタイと読むのは不正解ということになります。

従って、音仮名は一定していないものの、中国人には3世紀からずっと大和に倭国の中心があったという認識なのだと解釈されます。

『隋書』では、ヤマトは会稽の東方にあり、儋耳の近くであるとなっているので、儋耳とは中国の海南島の郡名であることから、日本列島は南北に長く、従って方角を誤認しているものの、ヤマト(邪馬台国)が九州内に収まる位置にはないとするのが7世紀の中国人の認識です。

また、『魏志』倭人伝の邪馬壹(壹)国の「壹」や倭王の「壹与」の「壹」が『北史』

などによれば「臺（台）」に変更されており、「壹」は誤写なのでしょう。

これに関連する事項として、臺与は『新撰姓氏録』に出てくる臺直氏や臺忌寸氏と同族の中国系渡来人とするのが素直な解釈であり、同じく『魏志』倭人伝に出てくる大夫・難升米は『続日本紀』天平17年条の難福子や宝亀8年3月条の難金信と同族の中国系渡来人とするのもこれまた妥当なように思われます。

3 おわりに

以上、2点の音仮名の話題を取り上げてみましたが、最近では邪馬台国の邪馬台に「ヤマト」や「やまと」のルビを振った書籍が多くなってきたように思われますが、国名や人名をどのように読むにしろ、それがどのような国であり、どのような背景を持った人物なのかが問われるのは言うまでもありません。

『日本書紀』の真実

刈谷市 酒井 誠

1 まえがき

『日本書紀』のおおよその内容はつかんでいるつもりであるが、何度読んでも納得の行かないところがある。根本的には、日本の歴史と言え、権力者の都合の悪いことは書けないのである。世界中を見渡してもそれは日本に限ったことではない。ましてや日本は憲法上では、四民平等と明記してあっても、特定の人々は生れ落ちるや否や、すでに特別の目で見られており、そこには歴然として差別が存在する。

そうした現在ですら憲法概念とは矛盾する世界が広がっているのであるから、今から1300年も前の時代では、現在の思考概念では計ることのできない事象があってもおかしくないであろう。

古代より残る文献資料には、残された理由があるはずである。日本を統治する上で必要があったからこそ残ったのであろう。私が今までに触れた文献、『日本書紀』、『古事記』、『懷風藻』、『万葉集』、『続日本紀』、『扶桑略記』、『藤氏家伝』など、どれ一つをとっても「おや」と思える箇所が見つかる。『日本書紀』に至っては、私の感覚とはずれた個所が山のように見つかる。他の方にはおかしいとは映らないかもしれないが、私として矛盾を感じる箇所について、『日本書紀』30巻中の22巻（皇極紀）以降について列挙してみた。

他の皆さんの忌憚のないご意見を頂戴したい。

2 天智天皇は存在したか？

天智紀は、最も不可解な部分が記録されているとみている。恐らく『日本書紀』の執筆にあたって一番最後に書かれた箇所ではないかとも思う。

もっとも疑問に思うことは、天智天皇の娘のほとんどすべてが天武天皇やその息子に嫁いでいることである。7世紀以降に、日本がどの程度まで統一されていたかはよくわかっていないが、各地にそれなりに豪族はいたと想像する。天智天皇の娘とて何も特定の一人にのみ嫁ぐことは、きわめて危険なことにつながる。幾人かの豪族との血族を結びつけることは、自分たちの血族の繁栄を担保するために必要なことと言わざるを得ない。しかも、嫁ぎ先は、『日本書紀』の上では、弟になっている大海人皇子親子なのである。もともと、

天智天皇の同じ血族の弟の関係者に嫁がせる意味は何か。私は納得がいかない。

額田王は、当初、大海人皇子の妃になっているようで、やがて十市皇女が生まれている。それが、天智に嫁ぐことになり、おまけに、生まれた娘までが、天智の息子の大海皇子に嫁いでいる。壬申の乱においては、大海皇子は戦に敗れて、斬首されて不破の関にいた大海人皇子の元にその首が渡される。母親である伊賀宅子娘は、自害している。しかし、天武の娘であるからなのか、大海皇子の妻である十市皇女は、何食わぬ顔で、天武朝で生活することになる。

やがて、高市皇子との浮いた話までうわさされることになる。さらに、不可解なことに、天武天皇と直接血縁関係にない、天智天皇の息子である川島（河島）皇子、志貴皇子らは、新しい朝廷内で悠々として生活して、「吉野盟約」の中では、「天皇の詔に従い、逆らうことないように」誓っている。さらに、大津皇子の謀反の計画を持統天皇に密告した話にもなっているが、（作り話であるという話もある。）その点については、『懐風藻』の中でも、「友人を売り飛ばした件では、薄情な人間であるとの指摘を受けている。」どこまでが事実であるかはわからないが、私は、壬申の乱において、近江京側にいた人々は、大海皇子同様に処刑され、流刑に合うならともかく、安易に天武朝内において、活躍している姿を見るとあり得ないように感じられるのである。志貴皇子に至っては、やがてその子孫である淡海三船が『懐風藻』を書いて、天皇の諱まで作成していることが信じられない。結果的には、天武天皇の血族は途中で絶えて、この志貴皇子の子孫の光仁天皇、桓武天皇が天皇家を引き継ぐことになる。

3 白村江の戦いは、いったいどこどこでの戦いなのか？

駿河の地で海戦のための船を建造して、一旦難波にて儀式を行って出航した。その際には、天智天皇の長女である太田皇女、すなわち大海人皇子の妃が乗り込んでいる。『日本書紀』には書いてないが、妃が載っていて出産までしたというならば、亭主の大海人皇子も乗っているとみるのが常識である。この場合は、戦いの中心として祖母の斉明天皇が乗船していることになっている。67歳であった。確かに昔の戦であるあら、中心となる人が士気を鼓舞するために乗船することはあり得るが、女性であってしかも高齢である。『日本書紀』を信用すれば、那大津に着いた後で、朝倉橘広庭に宮を築いたとする。その場所は現在では定かでないが、ようやく宮が築かれたというのに鬼火が走り、火災が起きて瞬く間に斉明天皇は崩御している。

そのあとには、百済を援助するために多くの配下の重鎮が出航する。天智天皇や大海人皇子という名前は出てこない。ましてや、藤原鎌足もどこにいたのか出てこない。天智天皇はどこで何をしていたのか。大海人皇子は名前すら出てこない。斉明天皇は女性の身であるから、九州まで出向いてきたのならば、天智天皇または、大海人皇子が船に乗って戦地に赴くのが普通ではないのか。

この660年代に北部九州が完全にヤマト政権の支配下にあるならば、ヤマト政権の重鎮が九州に出向いて、現地の軍属を使って戦いに備えればよいと思うが、どう見ても、指揮者も戦う兵士もすべて近畿地方から運ばれてきたように描かれている。

そのために、元々天智天皇は、北部九州の豪族であって、大海人皇子こそが明日香を中心に統治しており、敗戦の後に、天智天皇が九州から逃げかえり、近江（大津）に宮を築いたという説も生まれてくる。これが事実ならば、天智天皇の実話は和歌山地方に存在せずに、多くの物語を『日本書紀』内に組み込まなくてはならなくなる。明日香の斉明天皇が

小懇田宮を作って多くの国外の人々を招待したのだが、隣の水落遺跡に「天智天皇が水時計を作った。」などという話も作らなければならなくなった。

4 牽牛子塚古墳と越塚御門古墳はやりすぎ

牽牛子塚古墳は、斉明天皇の墓に比定されている。『日本書紀』には、自分の娘である間人皇女とともに埋葬してほしいという遺言らしきものがあって、二人分の墳墓である。そして、その墳墓の隣には、大伯皇女や大津皇女の母親の太田皇女の墳墓が並んで建造された。どこかの説明に八角形の墳墓という話があって、この古墳が斉明陵として決められたのであるが、それにしても現代風に作りすぎたようなイメージが強い。

5 大津宮は誰が建てたか？

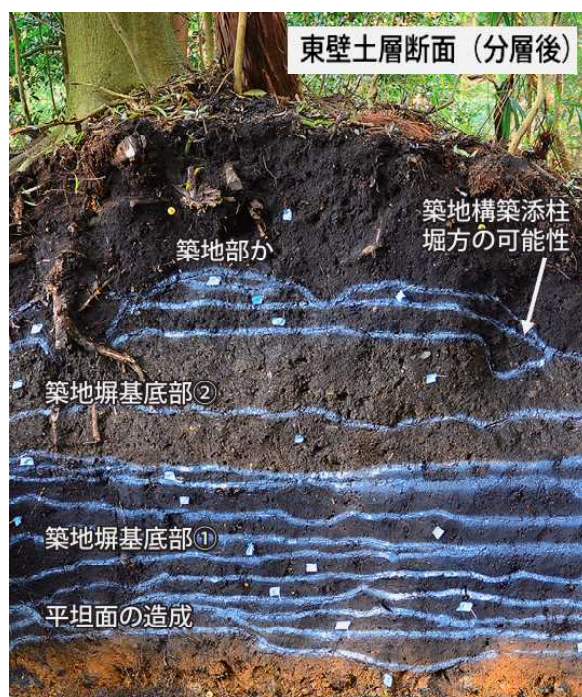
何度も書くが、大津宮は、現在よりも琵琶湖が広がっており、延暦寺山麓に対して、東西には数百メートルしか平地が取れない。したがって、藤原京や平城京のような「京城」が作れないのである。よくできて「宮」のレベルである。しかも、それだけでは戦になった時への対応ができない。私は「製鉄開発集団」の豪族の砦があった所であると推察する。ちょうど、この比叡山南山麓には、多くの鉄の採掘跡が残っている。

6 壬申の乱の痕跡

私は、考古学者も文献史学者も壬申の乱についての研究から目を背けているように感じる。大津京が発掘されようとしているが、住宅街にあって思うように発掘できないことをいいことに、これで満足してしまっているきらいがある。近江神宮とて、天智天皇の時代から存在するはずもなく、おそらく神社はまだ存在していなかったであろう。それにしても、天智天皇は長男であり、天皇なのであるから、祖霊神である天照大神を祀らなくてはいいのではないのか。それはどこで祀っていたのか？天武紀には、四日市市のトオ川で、大海人皇子が伊勢の方角を遥拝した姿が語られているが、天智天皇は何をしていたのか。現在の近江神宮は、祭神は、天智天皇である。生きているときから天智天皇が神様として祀られていたことはあるまい。

私が最も疑いの目で見ているのは、不破の関の土塁の版築模様なのである。わずか2、3mの高さの土塁が築かれていて、周りからの侵入を防御している。しかし、その断面図を見ると実に粗末である。きちんとした技術で版築が作られていない。岡山県にある山城の「鬼の城」や神籠石型山城に区別される「御所ヶ谷神籠石山城」でも、その断面は、バームクーヘンもどきであって実にきれいな縞模様が見られる。不破の関は、日本国内最大の内乱のあった場所なのである。

さらに、近江方と明日香方が激突した戦地の痕跡が見つからない。大量の鎧や弓矢の埋蔵物が見つかってもしよさそうに思う。瀬田川の橋の下あたりには、膨大な痕跡があつていいはずである。



私も中学時代から、先生方は、明日香から白村江の戦地まで出向いて戦い、67歳の老婆も参加したのに、たった一回の戦に負けたからと言って、唐軍を恐れて、今度は、こともあろうか滋賀県の辺境に都を築いてしまったことを、くどいように説明されたのである。しかし、その戦の話の中に出てくる、高安城も三尾城もいまだに見つかっておらずに、賞金までかけて山探しが行われた。

7 近江京の繁栄の歌はどうしてないのか？

近江京はわずか5年しか続かなかったようである。柿本人麻呂の都を謡った歌があるが、昔を懐かしんで作った歌で、「今盛りなり」というような歌はない。柿本人麻呂も同じ人なのに、助詞などを書き添えていない略体歌もあり、また助詞を添える非略体歌もある。同じ人がこんなに形態を変えてあえて歌を作るであろうか。私は、柿本人麻呂作歌集団がいて、みんなで持ち寄って作ったとみている。

8 「社」「神殿」と「神社」

皇極紀から持統紀までを見て、確かに神殿という言葉は使われているが、神社という言葉は一度も使われていない。しかし、「社」という言葉は使われている。一番多いのが、セットになっていて、「龍田と廣瀬の神」を祀ったという言葉である。出て来る数は非常に多い。この「龍田と廣瀬の神」を祀ることが何度も行われていることは、当然本殿に祀られることでなく、その時々において、「社」を作って、お祭りを何度も行ったことに他ならない。つまり、祭礼として臨時の場所を設営して行い、儀式が終われば片づけられたということである。そのことは『日本書紀』を見るとよくわかる。

また、『日本書紀』には、この「龍田と廣瀬」が何度も出て来るが、他の社はわずかしい。近畿一円の中にあって、有名な神社もほとんど出てこない。大神神社なんて一度も出てこない。熱田社が一度出てくるくらいである。これらにより、神社神道が広がっていないことがわかる。

9 673年には、伊勢神宮はまだできていない。

初代の斎宮として、大伯皇女が選ばれて、初瀬（泊瀬）川の宮にて禊を行って、伊勢に出立している。しかし、「伊勢神宮」に奉仕したという話は『日本書紀』にはない。これから伊勢神宮を建立する計画中的であることがわかる。しかし、すでに現地には、「伊勢大神」なる神が祀られており、やがてその神が昇格して「天照大神」になるはずである。

持統紀の晩年には、伊勢の地から熱田、東三河までの巡行が行われている。しかし、天皇が神社に手を合わせたことは一度もない。実は、この後の続日本紀にもすべての天皇の神社参拝がないのである。天皇は神社参拝をしてはならないものか、したがって自分できないからこそ、部下や斎宮に奉仕を変わってさせているのだろうか。

10 古代前方後円墳の発掘を願う。

50年前の古田武彦等による「天皇陵」発掘調査の要請を始め、近年国会においても「天智天皇陵」の発掘を求める提言がされている。時々細切れのごとくに発掘の様子が出てくるのであるが、きちんとした計画的な発掘は行われない。長い間「〇〇天皇陵比定地」として名前が示されるのみである。時は、21世紀であり、確かに世界で最も長く天皇制が続いていることは、日本人としての誇りかもしれない。しかし、2月10日を建国記念の日に

制定されて以来、その日は、神武天皇が紀元前の660年に橿原神宮で即位した日になっているのである。私はこの話を聞くといつも日本人であることに対して恥ずかしく思う。

テレビでも、エジプトのピラミッドの発掘の様子が映し出される。世界の最先端の技術を駆使して、ピラミッド内の王様の墓を見つけようと取り組んでいる様子が映し出される。ミイラが見つかって非公開とせずに、きちんと映像で見せてもらえる。そんな様子を見るとどうして日本では、王墓と言われる遺跡に発掘のメスが入らないのかもどかしく思う。

私が一番発掘してほしいのは、天智天皇陵である。そこで、遺骨の一部も見つかってDNA鑑定でもできたならば、大いに学問が成長する。天智天皇なる木簡も見つかれば、過去の歴史がきちんと科学的に裏付けられる。万が一にも、現在言われている歴史とは違った結果が見つかったとしても、決して恥ずかしいことではなく、日本が開かれた国として賞賛が得られるはずである。

11 おわりに

前書きに、天智紀は最後に書かれたのではないかと述べたが、あまりにも私の感覚として現実にはあり得ない事柄が多すぎる。しかも、現在科学を利用して、さらに深く追求しようとする営みが欠如していると思われるのである。以前述べたが、「水落遺跡」にて、確かに銅管や漆塗りの箱が見つかって、その時代としては最先端のことが行われていた可能性があるが、それを天智天皇と結びつけるものなどない。飛鳥資料館の学芸員さんにも直接聞きに行ったが、「私は水時計を作ったことがある」と言われる。ならば、日本に1台くらい実際に動く水時計があってもよさそうである。是非、飛鳥資料館に展示してもらいたい。

そうした曖昧さによって、天智天皇は九州王朝の王であり、東遷して近江京を作って、明日香にいた大海人皇子、すなわちヤマト政権との間で壬申の乱が勃発したというような論考も発表されている。これから最も真剣に研究を進めなくてはならないのは、天智紀の部分であると思う。

■ 前回の会報の目次と話題

- ・2025年 年頭にあって 会長 畑田寿一
- ・獲加多支鹵はウェカタシロ(エカタシロ)と訓む(1) 吉川市 堀口啓一
- ・天日槍伝説と三宅連氏 東海市 大島秀雄
- ・『日本書紀』を720年代の人々はどのように読んでいたか? 刈谷市 酒井 誠
- ・*別途「上代特殊仮名遣いに対する考察」など関連資料3種を出席者に配布
- ・7世紀の旅行と貨幣経済 一宮市 畑田寿一

■ 例会の予定

- 1 日時 令和7年2月15日(月・祝)13時半
- 2 場所 名古屋市市政資料館(参加料500円) 第4会議室

* 次回の例会には東海の古代293号、294号をご持参ください。

- 3 次々回以降の予定 3/16、4/12、5/8、6/15

■ 投稿締切り日 2月24日(月)

送付先 toukaikodai@yahoo.co.jp 石田

■ 293号の正誤

- ・7頁13行目

誤 『日本書紀』安康3年より
正 『日本書紀』清寧天皇即位前期より

- ・8頁の表

時期	名前	記事
安康3年10月 額宗天皇即位前期	日下部連使主 (後に田疾来と改名)とその子吾田彦	弘計王、億計王の舎人
清寧天皇即位前期	草香部吉士漢彦	星川皇子の乱の時、河内三野間命を大伴室屋大連に要請し成礼として、東主は漢彦に田地
皇極元年2月2日	草壁吉士磐金	舒明崩御の後、百濟の弔使と
皇極元年2月22日	草壁吉士真跡	新羅に派遣された一遺わすよう指示された。

- ・16頁24行目

誤 ボルネオ説(先師古田武彦、古賀達也氏)
正 ボルネオ説(先師古田武彦)

* WEBには修正後のものを掲載します。